お世話になったご近所の人たち、銃後の子どもたち

僕が物心のついた頃、うちでは酒屋は営業していませんでした。戦時企業統制令という法律で企業整備がすすめられて、店を閉めたのでした。現在と変わらぬ三〇数坪の敷地に平野さんの郵便局と真柄さんという電気屋とうちの三軒の木造三階建の家が建ち、その店の半分を小西という油屋に貸していたのです。残りの半分にカウンターを造り、母が一人で小さな飲み屋をやっていたのです。町の旦那衆や近所の相互タクシーや相鉄運輸の人たちがお得意さんでした。父は店を閉じた後、千駄ヶ谷の海軍館（現在の東郷神社や社会事業大学）ちかくの酒類配給公団につとめ、帰宅後は母と交代で店をやっていたようです。ふたりの姉に連れられて、早稲田からバスで父の勤務先を訪ねたことが何度かあります。その都度、海軍館へ行き日本海海戦の大きなパノラマや軍艦の模型をみたりして後、食堂で軍艦食をごちそうになって帰るのが常でした。　町内に阿部さんという肉屋があり、そこの小父さんがよく店にきて、ブタ肉を竹の皮をさいて紐状にしたものや、凧糸でしばってから煮込んでチャーシューを作ることを教えてくれたりしました。この焼き豚やあおやぎのぬたや、みそ煮などを出していたようです。店の奥は細長い四畳の部屋と狭い台所だけで、二階と三階に二間づつありました。三階には古い箪笥や長火鉢などがおかれ、姉たちが幼い頃つかった、木製のスベリ台、コリントゲームなども置かれていました。和綴じの古い本や昔の銭函などもありました。

三度の食事は階下でとり、二階の二間で寝るので三階はほとんど使っていなかったようです。夏は窓

にすだれを下げ部屋には緑色をした蚊帳をつってです。蚊帳を畳むとき「海だ、海だ」といって泳ぐまねをして、姉たちに叱られたりもしました。のちに、昭和二〇年の三月、戦災で焼けた大久保の支店の大橋定右衛門さんと息子の定之さんが仮住まいしたのも、三階でした。定之さんが早稲田大学に入学願書をだしに行くのについて行きました。構内はガランとして人の姿はほとんどありませんでした。演劇博物館の脇の自動車の車庫では、旧式の車が二台ほこりをかぶっていました。食事は階下の四畳で卓袱台をかこむのでした。柴又の寅さん流のいいかたをすれば、明るい電気の下で親子そろってちゃぶ台を囲むのでした。この卓袱台で食べたものの記憶に鮮やかな黄色いカレーライスがあります。姉がコップの水の中にスプーンを入れてくれました。一番年少の僕は水を飲みのみ汗をかきながら食べました。正月は鶏肉が少し入ったおすましのお雑煮で、練炭火鉢で餅を焼いて入れました。うえの姉の繁子は小学校高学年で台所の手伝いをしており、餅を焼くのは次姉の敏子の役目でした。町内には沢山の商店があったけれど、国民学校に上がる頃まで、町にはまだ、物売りの声が聞こえていました。牛乳やさんの自転車の荷台で瓶が「カタカタ」なる音で始まり、納豆や豆腐はもとより「イワシコー、イワシコー」や「あさりー、しじみー」の声が朝早くから夕方まで代わるがわるやってきました。夏の頃は篭をを前後に担いで「ワタリガニ」や 金魚売り、盆明けには「お迎い、お迎い」といって盆飾りのかたづけまでがやってきました。上水地帯のこのあたりでは、盆の飾りも川に流したりせずに、「この人たち」に心付けをわたして始末を頼むのでした。煙管（きせる）の手入れをする羅宇（らおや）屋、鋳掛（いかけ）屋、傘、コウモリ直し、桶や樽のたが直したりする「タガヤ」までやってきました。

昔の親たちは忙しかったのか、正月でも一緒に遊んでもらった記憶はありません。凧を買ってもらっ

ても、揚げてくれるのは隣の電気屋のサブちゃんという工業学校に行っているお兄さんか、そのむこう隣りの畳やの二橋作太郎という小父さんでした。二橋の小父さんは畳屋の二階の物干し台から（ここには小父さんの大事な植木が沢山おかれていました。）サブちゃんは穴八幡神社の境内から家の方に向かって高く高く揚げてくれました。午後になると、姉たちについて、向かいの金時という蕎麦屋の二階へカルタや双六をしに行きました。また、冬のさむい夜、姉たちは湯たんぽをもって金時に行き、いらなくなったソバ湯を貰ってくるのがならいでした。当時、蕎麦屋が火を落とす前にお湯を貰いに行くのは当たり前のことで八幡様のまえの三朝庵にはご近所の人が大勢、湯タンポや薬缶を持っていったりしていたそうです。金時の二階には当時珍しかった電気蓄音機があって、子どもはさわっていけないとと云われていました。ここの末っ子の和夫が良い遊び相手で小林のセー坊、杉田やのタケオなどと一緒にコークスの燃えかすの山や、サバ節の出しがらのほしてある横丁でよくあそびました。普段のあそびは戦時色一色で、今の脩也ぐらいの頃から背嚢を背負い鉄砲をかついだ兵隊さんでした。走り回って転ぶと必ず石を拾って起きるので「この子は大物になるヨ」と云われたそうです。近所に近衛の騎兵連隊があり、皇居の警備に騎兵隊が緑のズボンで旗をたて、サーベルをきらめてかせて毎日行くのを見ていたからでしょう。騎兵隊の通ったあと、大人たちは家庭菜園や植木の肥料になるといって、馬糞を拾い集めていました。

少し離れたところに（現在のマクドナルドのあたり）角地（かくち）という大きな帽子屋があり、その脇に町会の事務所と巡査の休憩所がありました。夏休みのラジオ体操はその前の大通りで、「蠅トリデー」に蠅のはいった袋を持っていって鉛筆など貰ったのはここでした。帽子屋のおおきなウィンドウには羽の

ついた大礼帽や山高帽、ソフトとかパナマやいろんな学生帽が並んでいました。ある年の寒くなり始めの頃、事務所から大きな声でラジオ放送が聞こえました。「戦争が始まったんだヨ」と大人たちが話していました。昭和一六年一二月八日太平洋戦争の開戦でした。

畳屋の二橋さんのところは小母さんと、娘の綾さんと三人暮らしで、小母さんと綾さんは隣でミルクホールもやっていました。

ちいさな僕は二橋の小父さんのことをオイの小父ちゃんとよんでいました。父親が昼間いないので、オイの小父さんの自転車の後ろに乗せられて、あちこち連れていってもらったり、畳やの店先で絵本をよんでもらったりしました。そんなとき、おやつは食パンの耳を揚げたものに砂糖をチョッピリかけたものでした。自転車では砂利場とか豊か橋や矢来の得意先や仕入先に行くのが常でした。でも、紀元二六〇〇年のお祝いのときは日比谷公園の方まで、大きなパノラマや海軍軍楽隊や陸戦隊の行進を見に連れられて行きました。その向こう隣りの赤坂茶店の先に大きな石の門があり、日下さんという外科の医者でした。いまでも右掌に残っている縫合のあとは、一升瓶をもって転んで、ここの先生に縫ってもらったのだそうです。ここの前庭までが僕の兵隊ごっこの世界で、大人達に見守られながらの一人遊びの時期をすごしたのでした。尾張屋の家具やの小父さんに「まあちゃん、ちょっとおいで」と云ってかたい新聞紙で鼻をかんでくれるのを逃げ回ったり、床屋のおにいさんに擦り傷に赤チンをぬってもらったり、随分おせわになったものです。

シンガポールが陥落して昭南島に名前がかわったときは花電車がでたり花火が揚がったり提灯行列がでたりして大騒ぎでした。早大正門通りから提灯行列が出発するのをみにいったりしました。ご近所

のおつき合いは隣組が一緒の光進堂の餅菓子やまでで森写真館もありました。隣組の会合は畳やの二階で開かれました。防火演習とかキンゾクキョウシュツとか戦時国債とかの話を母の膝のうえできいていました。防火演習はバケツリレーと警防団の手押しポンプが主役でした。正月とかなにか特別な日には、道路の真ん中にルーズベルトやチャーチルの似顔絵をぶらさげて、これを目標に放水したりしていました。子どもたちは口伝えに覚えた「出てこい。ニミッツ、マッカーサー」など歌いながらの見物でした。

ところが、防火演習が本当に役立つ日が来ちゃったのです。真っ青に晴れ渡った空のむこうで、花火が揚がったような音がいくつもして、白い煙が空一杯にひろがりはじめました。母親に引きづり込まれるように家にはいりました。コワゴワ硝子戸のなかから見ていると、警防団の人たちがガラガラとポンプを引いて「金時」の脇に入って行くのが見えます。やっと空襲のサイレンが鳴り始めました。ずいぶん時間がたった頃、「金時」の脇まで見に行きました。髪結いの小林の向こうの屋根の上で、店にお酒を飲みに来る遠藤の小父さんが、バケツリレーの先頭で頑張っていました。昭和一七年四月一八日昼過ぎのことでした。アメリカのB25による東京初空襲だったのです。この日、早稲田中学校の構内に六五発、鶴巻町の岡崎病院付近に三二発の焼夷弾がおとされ、早稲田中学校では体育の授業中の　小島　茂　（四年生）さんが直撃をうけ亡くなっています。数日後、乾物やの糟屋君たちにさそわれて、岡崎病院の焼け跡を見に行きました。コンクリートの壁が崩れ落ちてたいへんでした。それから江戸川公園まで足をのばして滑り台や崖のぼりをしました。この頃にはジャングルジムは供出で撤去されてありませんでした。帰り道、石川の乾物やのあたりで、小林の盛ちゃんが突然はしりだ

しました。いくらよんでも待ちません。やっとおいつくと、こんどは変な歩き方をしています。誰かが「くさいナァ」といいました。みると盛ちゃんのズボンから黄色いものがはみだしていました。当時、馬場下のほとんどの家に内湯はなく、銭湯に行っていました。うちでは、真向かいの保志の湯でした。下駄箱にはカタカナで「イロハ」が書かれていて、子どもたちは、ここで字の勉強でした。数字は路上の石けり遊びでです。風呂屋ではこども同士「フルチン」であそび、「ユズ湯」や「菖蒲湯」もありました。盛ちゃんは器用な子どもで湯ぶねのなかで菖蒲笛を作って鳴らしたりします。でも、「湯ぶね」にはいつも手ぬぐいを頭にのせて、目をつむって「ナンマンダブ、ナンマンダブ」や浪速節をやっている小父さんがいて、あまり騒ぐと「ウルサイ」とどなられます。熱いので水をうすめると怒る小父さんもいます。たまには、八幡坂の天徳温泉に父親に連れられていきました。でも、お湯が「クスリユ」でオレンジ色をして薬臭いのと、頭を父親にゴシゴシ洗うので、あまり好きではありませんでした。だけど、帰りには三朝庵やライオンベーカリーによってご褒美を貰えるのは、たいへん魅力的でした。尾張屋の家具屋には一才上の、隣の郵便局には一つ下の男の子がいました。光進堂の手前隣りの森写真館にも同年配の男の子がいましたし、髪結いの小林兄弟、杉田屋の武男、大倉や糟屋君などと赤門の誓閑寺の境内でよく遊びました。糟屋君がザルと棒を持ってきたので、坂本の米やの前でこぼれた米をひろいあつめて、「スズメ」とりをしたこともあります。大勢の子どもが物陰でジッーと息をひそめて、雀をまつのです。しかし、上手にとれた記憶はまったくありません。雨の日は大工の大倉の下小屋やうちの三階が遊び場になりました。天気の良い日は誓閑寺の小さな切り通しをぬけて、早稲田高等学院のグラウンドに行きます。ここには小さな泉があったり、トタン小屋の中

に、布張りの半ば壊れた飛行機が置かれていました。破れたトタンの間からもぐりこんで、尾翼にのったり、操縦桿を動かしたりして、得意になりました。反町さんの屋敷のほうには小さな池があってキラキラ輝く水が流れていました。誓閑寺の切り通しは雨の日には、よく崩れて白い人骨がでることがあって、チョット気持ちの悪いところでした。当時は現在の文学部のスロープの上がグラウンドで、スロープ下に何棟かの木造の校舎があり、記念会堂のあたりも小さなグラウンドで雨が降ると、遊水池になるところでした。ここにはヤンマなどの大きな蜻蛉がやってくるので、夏の日には、帽子をかぶり、鳥もちをつけた竹をもって、通ったものです。夏目坂の下におばあさんがひとりでやっている駄菓子やをかねた小さな玩具やがあって虫網や鳥もちもここで買います。小さな手に「ツバ」をつけて細い竹竿をクルクル回しながら鳥もちをのばして行くのです。羽黒山や双葉山のブロマイドや「マルメン」などもここで買います。でもキンゾクでできた「ベーゴマ」はもう、売ってはいませんでした。その頃、幼稚園は鶴巻小学校にあるだけで、そこに通っていたのは文房具屋の本橋さんの息子と軍属のせがれの野中賢山の二人だけでした。幼稚園帰りの二人を「すず金」の鰻屋のまえで鰻のいけすの水をかけたりハヤシたりして、何度も泣かしたことがあります。杉田やの前と武蔵野の餅菓子屋のまえが葦簀でかこまれて土木工事が始まりました。空襲に備えて大きな貯水槽をつくるのです。穴八幡の崖の下では防空壕を作る工事をやっている最中でした。どこのお店でも、だんだん品物が減っていきました。配給切符とか衣料切符がないとものが買えない時代になっていたのです。

昭和一九年四月早稲田小学校（当時は早稲田国民学校）に入学、配給制度のなかで、早稲田町の洋品店で買ってもらった「スフ」の新しい制服を着て母に手をひかれての入学式でした。チョビひげの

小さな「カウチョウセンセイ」がなにか恭（うやうやしく）しく読んだり、話をきいたりして、式が終わりました。組編成があり、僕は一年一組でのちに高校まで一緒になる飯塚幹男、亀田晃之と一緒になりました。担任は成見という男の先生でとても恐い人です、校長先生は布施震郎先生です。満州の兵隊さんが「銃後の少国民が元気になるよう」と送ってくれたという、あひるの肉のはいったみそ汁と大豆入りの大きなオニギリをいただいて帰りました。明くる日からは上級生の班長さんを先頭に集団登校、勉強もはじまりました。姉たちの勉強で空覚えをしていた「サイタ、サイタ、サクラガサイタ」ではなくて「アカイ、アカイ、アサヒ、アサヒ」で教科書の名前も「ヨミカタ」「カズノホン」でした。

五月に遠足、穴八幡神社に参拝、大鳥居のしたで記念撮影後、近衛騎兵連隊の見学でした。ここは普段はなかなか入れて貰えない所で、僕は一度だけ家族と軍旗祭のときに見学にゆき、うどんをご馳走になったことがあるだけでした。兵舎や馬の病院や蹄鉄の工場を見学しました。軍旗祭の見学にきた頃よりずいぶん馬の数が減っていました。かわりに真新しい戦車が何両かあり、みせてもらいました。夏休み前、僕らの天下だと思っていた高等学院の構内が立ち入り禁止になりました。陸軍軍医学校に接収されてしまったのです。

昭和一九年四月、全国の医学部、医学専門学校の男子卒業生全員が軍医になることが決まり、戸山町の陸軍軍医学校と横浜市戸塚区の海軍病院で軍事教育をすることになった。設備も足らないので隣接の高等学院を接収、使用することになったのだ。

全国の市町村から若い元気な医者が居なくなってしまう、との声が出て、福島や札幌に女子医学専門学校が創立

されたのも、この時のことだ。それ以前から、東京には私立の東京女子医学専門学校と帝國女子医学専門学校がありました。

また、学徒出陣で出征していく学生も多く、店に出入りしていた相撲部の人たちも安兵衛の酒枡で武運長久をいのって出かけていきました。でも、戦後、早稲田に戻ってきた人は何人もいませんでした。

昭和十八年十一月十五日戸塚球場で行われた学徒壮行会には都内の学生六千名が集まったといわれています。

現在の水稲荷神社境内に早稲田大学関係戦没者慰霊碑が建っています。

夏休みがおわると、遊び場に次いで友達もいなくなっていた。六月に大都市の国民学校初等科の子供たちは疎開をすることになったのです。学童疎開という制度でした。地方の親戚や知人をたよって「縁故疎開」するようにいわれました。しかし家のように、両親とも、東京生まれの東京育ちで地方に知り合いもない子供たちには、「集団疎開」でした。三年生から六年生までが行かねばなりませんでした。我が家でも、六年生の次姉敏子が夏休みのおわりに、柳行李一つの身の回り品と、布団一組をもって、栃木県へ出発して行きました。学校は三年生以上がほとんどいない寂しいものになりました。一年生のクラスも、男女あわせて一組だけでした。成見先生は招集され、担任は福島という女性で男勝り人のでした。とても怖い先生で、すぐホッペにピンタが飛んでくるのでした。體操の時間の今まで出来たことのない鉄棒をやらされ、落ちて怪我をしました。その時も、衛生室で脱脂綿を唇にあてがわれただけでした。それ以来、僕は鉄棒を逃げる子になりました。牛込二中で磯崎先生に特訓をやられるまで、出来ませんでした。この人は少なくとも、体育指導者としては失格だった先生だと思っ

ています。学校給食も米飯はでなくなり、うすいみそ味のついたコッペパン一個が毎日でした。その上、米軍のB二九爆撃機による空襲が始まりました。

「学童集団疎開」は国民学校初等科の三年生から六年生がいきました。

東京三五区と横浜、川崎、横須賀、大阪、神戸、尼崎、名古屋、門司、小倉、戸畑、若松、八幡の子供たちが対象で都内から二五万人、全国で四〇万人近くの子供が両親からはなれて生活することになったのです。

大人も子供も防空頭巾をいつも持ち歩いて「警戒警報」や「空襲警報」におびえる生活がはじまったのです。学校では「警戒警報」で授業中止、教壇からコッペパン一つをもらって、校庭に集合、上級生と集団下校の毎日でした。高田馬場下町には、五、六年生がいなくなってしまい、穴八幡の斉藤さんが四年生で、班長になりました。斉藤さんには一つ年下の弟さんと、同じ年の従兄弟もいて、八幡さまには男の子が三人もいるので、境内に集まって一緒に遊びまわるようになりました。お参りや「戦災除けのお守り」をもとめて、やって来る人たちの中を走り回りました。向かいの全線座の方にも、足をのばしました。切符きりの小母さんと顔見知りになって、たまにはタダで見せて貰うことも出来ました。「姿三四郎」とか「宮本武蔵」「無法松の一生」などをみた記憶もあります。おとなになってから、再上映されたとき、「当時、すごい映画をみていたンダ」との思いをしました。冬至の日は戦時中でも、沢山の人たちで賑わい、夜店もでていました。ガスの風船や水飴など買うことはできません。わずかばりの海産物とか、迷子札や箸など、オモチャも、陶製のベーゴマ、戦車でした。

家では、長姉繁子が通っていた「牛込女子商業」の勤労動員で品川の製菓工場へ通うようになりました。海軍さんの乾パンとお菓子を袋に詰めるのが仕事で、たまに「金平糖」などを貰って帰って来ることがありました。十数粒の「金平糖」を大事にもって八幡さまに遊びにゆき、仲間たちと二粒づつわけて食べるのです。山田君、手塚君も一緒でした。戸塚の方から須藤くんとか木村君もやってきます。疎開していった子供が多く、広い範囲から集まらないと、「水雷艦長」とかは出来ないのです。僕たちの天下だった「ガクイン」は陸軍の施設になり、もう遊びにゆくことは出来ませんでした。

正月が過ぎると空襲はますます激しくなりました。「警戒警報」もでないのに、いきなり「空襲」というのも、珍しくありません。「モンペ」やズボンをはいたまま、寝る生活が始まりました。自分の家の床下や歩道に掘られた防空壕は「助からない」と噂がとびました。その度に「八幡さま」の下にほられた防空壕に避難するのです。この防空壕は厚い鉄筋コンクリートで囲まれ、換気装置もあるから、五〇〇キログラムの爆弾でも大丈夫といわれていました。しかし、コンクリートの床に座って何時間もジットしているのは、とても辛いことです。三月一〇日の夜中、寝ているところを母に起こされ、防空頭巾をかぶり、水筒や小さなリックを背負って避難しました。中はいつもと違った空気でした。出入り口の扉はまだ閉まっていないので、外を覗こうして叱られました。何時間も「警報解除」になりません。明け方、ようやく家に帰ることになりました。外にでると東の方が真っ赤でした。空の半分が赤い部分です、父や警防団の男の人たちが走り回っています。「もうじき、こちらに逃げてくるゾ、水だけでも、用意しとこう。」そのうち、顔を真っ黒にしたひとたちが、大勢やってきました。「有り難う」といって水を美味しそうに飲むのですが、着ている物が、濡れたり、焦げたりした人も沢山い

ました。次姉の敏子は国民学校を卒業して、進学するために集団疎開から帰っていて、水をくんだりのてつだいをしています。「本所、深川は全滅、日本橋も・・・・」の声がします。これが、三月一〇日の「東京大空襲」です。この夜、浅草、本所、深川、城東、日本橋、下谷区のほとんどが、全滅、三十万戸ちかくの家が焼け、姉と同じように疎開先から帰っていた六年生を含む八万人以上の人たちが、この日火や高熱で亡くなったのです。

早乙女貢編「東京大空襲」には飯塚幹男君のお母さん（飯塚敏子さん）の手記が載っています。これによると、陸軍戸山学校、陸軍病院の一部、済生会病院のほとんどはこの日に焼けたと書かれています。済生会病院のほか、早稲田南町に陸軍偕行社簡野病院もありましたが、全て一般の人は診てもらえませんでした。牛込区のなかでも、北町、筑土町、白銀町などは三月十日、この日に空襲をうけている。吉田武史遺稿集「山旅の記」に箪笥町付近では消火にあたった消防手までが消防自動車ごと焼けたと書かれています。

もう、東京には子供はおいておけないと「根そぎ学童疎開」になりました。国民学校の授業はなくなり、四月に入学したばかりの一年生までが疎開することになり、僕も家族やご近所の皆さんと別れて、栃木県の上三川のお寺（河内郡上三川町所在の普門寺）に行きました。寮についた日、汽車の中で虱を写されたのが見つかり、全部着替えさせ四年生の関根さんという女の子とふたり、仲間から離れて、本堂の廊下に寝かされました。それは、虱はもう居ないとの確証がとれるまで、三日も続きました。

最初はお泊まり遠足のつもりでしたが、夜泣きする子も何人もいましたし、家に帰りたい一心で寮から逃亡して、鉄道線路を歩いて、連れ戻される子もいました。手紙は一週間に一度だけ、それも小さな葉書でした。あの出発の日、別れて、もう両親や家族に会えない可能性はみんなにあったのです。戦後、東京へ戻る日、迎えてくれる家族がいなくなってしまい、寮に残った子供もいたのです。僕もあの三階建てのタイル貼りの家も、この年の五月二五日の戦災で焼けてしまい、二度と住むことも、見ることもありませんでした。

終戦後の十月、東京に戻ることはできたけれど、友達のほとんどは早稲田に戻ってこなかったし、浜松の在に戻ったという二橋さん一家、電気屋の真柄さんも、郵便局の平野さんにも、もう合うことはありませんでした。

都内の国民学校は昭和二十年四月から授業閉鎖になっていました。馬場下を含む牛込地区が戦災で焼けたのは五月二十五日、この夜、喜久井町から早稲田町（現在早稲田大学理工学研究所）に掘られた横穴式防空壕では、百五十人以上の方が亡くなりました。翌日、早稲田南町に焼死体三〇〇体、喜久井町五〇〇体、鶴巻町に五〇〇体、牛込北町にも三〇〇体の遺骸が集められ、戸外で荼毘にされたと記録されています。